

昭和二十四年七月二十三日
第四十一回
（毎月一回・十五日発行）
第三種郵便物認可

（通第二一〇号）

目次

信仰とは

ただ念仏して

池山栄吉……………(1)

近角先生に別れまつりて

白井成允……………(12)

観無量寿経講話(二)

福島政雄……………(17)

慈光

第十八卷

第十一号

信仰とは

——ただ念仏して——

池 山 栄 吉

前回は独訳歎異鈔についてお話をするつもりで参りましたところ、お集りのかたがたのうち、独訳のお話は御迷惑だろうと思われるかたが多数ありましたので、それは抜きにして、専ら第一章について、私の感想をのべさせて頂いたのでした。その際おことわりいたしました通り、別に腹案とでもなく、思い浮ぶがままにそれからそれと色々なことを申し上げました。従って秩序が整って居ないどころか乱雑極まるもので、私自身ですら先日はどうな話をしたやら一記憶しておりませんような次第で、その点は今日も同様と御承知を願っておきます。

ところで、今日は主として歎異鈔第二章を目処（めど）にとってお話をしたいと思います。が常体（つねてい）の講義ではなく、本文と幾分の関連ある思いつきを述べるにとどまることは、これも前回とかわらないのであります。

なるべかりける身が念仏をもうして地獄にもおちてそうわばこそ、すかされたてまつりてという後悔もそうらわめいずれの行（きよう）もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。

弥陀の本願まことにおわしませば、釈尊の説教虚言なるべからず、仏説まことにおわしませば、善導の御釈（おき）虚言したまうべからず、善導の御釈まことならば、法然の仰せそらごとならんや、法然の仰せまことならば、親鸞が申すむねまたもてむなしかるべからずさうろうか。詮（せん）ずるところ愚身が信心におきてはかくの如し、このうえは念仏をとりて信じたてまつらんと、またすてんとも面々の御はからいなりと、云々。

本章の文義（もんぎ）——信的共鳴ではない、文字の示す普通の意義——は別にむずかしいところもないようですが、若し幾分わかりにくいところがあるとおぼしめすかたは、意識もあわせてお読みになるとよいと思います。

一、魂の誕生地

『法然の仰せまことならば、親鸞の申すむねまたもてむなしかるべからずさうろうか』……明けておとどし、まだ岡山に居ました頃、津山の手前（てまえ）岡山から二時間ほどで行ける誕生寺、法然上人の誕生の地、そこへ参ったことがあ

各々十余ヶ国のさかいをこえて、身命をかえりみずしてたずねきたらしめたまう御ころざし、ひとえに往生極樂のみちをといきかんがためなり。しかるに念仏よりほかに往生のみちをも存知し、また法文等をもしりたるらんと、ころにくくおぼしめしておわしましてはんべらんは、おきなるあやまりなり。もししからは南都北嶺にもゆゆしき学生たちのおく座（おくら）せられてさうろうなれば、かのひとびとにあいたてまつりて、往生の要（よう）よくよくきかるべきなり親鸞におきては、たゞ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとの仰せをこうむりて信ずるほかに別の子細なきなり。念仏はまことに浄土にうまるるたねにてやはんべらん、また地獄におつる業にてやはんべらん、総じてもて存知せざるなり。たとい法然上人にすかされまいらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさうろう。そのゆえは自余の行をはげみて、仏に

りました。岡山には十数年住んで居りまして、一度はと心がけていたのですが、機縁が熟したのですか、かねての志願（おぼろ）をはたすことになりました。

大方（おほくた）の桜の花は散ったが、まれにはまだ見頃（みごろ）が残っている頃で、遠近（とんじん）に見える桃の畠（はたけ）は赤く、菜種（なづな）の花が黄いろく、春の色の濃くただよっている野辺を汽車は私を乗せて走って行く。その間、私は何とも言えない靈感にしみじみとひたることが出来たのでした。

私は思いました。今自分は、空間的には僅かに二十里たらずのところを行くだけであるが、時間的には七百余年の昔にさかのぼって、自分の魂（たましい）の源に近づきつつあるのだ。なぜかというと、若し法然上人がお生れにならなかつたら親鸞聖人……真宗の祖師としての親鸞聖人の出現もあり得なかつたに違いない。『曠劫多生のあいだにも、出離の強縁（きやうげん）しらざりき。本師源空いまさずば、このたびむなくすぎなまし』七百年の昔、吉水の禅房での両聖人の会見は、親鸞聖人に『よきひとのお、せをこうむりて信ずる』機会を得せしめた。もし聖人にこの機会がなかつたとしたら、聖人をよきひとと仰ぐ今日の自分も出て来ようはずがない自分の今日あるは、ひとえに聖人のおかげであり、聖人の出現は、法然上人の誕生に依属（いぞく）する。信仰の流（なが）が古今一つである以上、自分のからだの誕生は明治某年であつたにせ

よ、心のそれは遠く七百年の昔にさかのぼる。法然上人の誕生地は、即ち自分の誕生地である。かうして誕生寺へ行くと道すがら、時処を超越した偉大なる信の上の自分を観察することが出来たのであります。

法然上人のほかに、もう一人、親鸞聖人が、父のように崇び、母のように慕われたかたがあります。それは聖徳太子であります。太子の御廟は河内の磯長にあるとはかねて聞いておりましたが、住吉に住むようになってからは、これもやはり二時間ほどで行けることになりましたので、いつか参詣したいと思つていたところ、去年の大晦日でした丁度作が東京から帰省してましたし、岡山からも信友が見えましたので、これ幸と急に思い立って出かけました。その途中も、聖人が太子を和国の教主と崇め、絶対他力の信仰を獲させて頂いたのも、全く太子のおかげであるとおよろこびになったことや『聖徳皇のあわれみて、仏智不思議の誓願に、すゝめいれしめたまいてぞ、住正定聚の身となれる』の和讃など思い合せて、誕生寺詣での際と同じような崇美な感をいだかせられました。

二、信仰のつながり

祖師にきててしのびまつらん聖太子、多々のごとくに阿摩のごとくに。これはその途中の感を詠んだ腰折で、歌にもなんにもなっていないでしょうが、同じく偉人をしのぶ

ないが、とにかく呑気にしている場合でない。遅くも二十九になるまでには、成仏の準備を整えなくてはならない。『十乗三諦の月、観念秋をおくり、百界千如の花、薰修年をかさね』学問に、修行に、一生懸命いそしまれたのは、さもありなんことであつたのです。

四、ファウストの歌

十年は経つてみれば速いものです。聖人は二十九の春を迎えました。だが努力は如何に報いられたのでしょうか？幸なるかな！この問題は否定されたのです。それが肯定されたなら、聖人はもはや私達の聖人ではなかつたのであります。研学とは険しい砂山を徒歩でよじのぼることでありました。修行とは、激しい流にさからつて小舟を漕ぐことでありました。いっばし前に出たつもりでも、ある目標に目をやると依然として元の所でもがいているに過ぎない進むはおろか、すこしでも油断すると、忽ち後にもどつて了う。『俺は依然たる旧阿蒙だ！お利口さほもとのまんまだ、……俺達にはなんにも解るものじゃないんだ』とのファウストの歎は、聖人の唇からめざるを得なかつた。出離生死のたねとしては、何一つ得られたという自覚のない中に、たった一つ明瞭になったのは、自分の器量のつたなさでありました。『心つねに散乱して一心をうるることかたし。身とこしなえに懈怠にして精進なることなし』頭燃を

にしても、その人と信仰のつながりがあると、ないとでのび工合に大きな相違があると思ひます。信仰のつながりのない偉人をしのぶのは、結局その人の偉さをほめたり、手柄をたたえたりするだけのことですが、信仰のつながりのある人をしのぶときは、その人の心と自分の心とがおなじ波動の脈を打つ。いかに時代と場所、境遇と性格を異にしていようと、靈犀一点の相通するものがある。一つ泉から湧く同一念仏の流に掬む仲である。こうした感じの支配するものが、今人と古人とをつなぐ信仰独特の作用であつて、これこそ実に信ずるもののにみ恵まれる感興であり、特権であります。

三、あと十年

聖人も磯長の廟へ参詣されました。それは聖人がまだ十九歳の時で、この参拝が聖人の獲信の上に一大転機となつたのであります。聖人がわざ／＼磯長へ参られたのは、もとより一時の気まぐれの遊山気分からではない。一つには悲願弘宣の恩徳を謝するため、また一つには出離解脱の引導を請わんがためであつたに違いありません。この時聖人に夢のお告げがありました。それによると、聖人の生命はあと十年で終ると同時に涅槃のみやこに生れるというのです。冥途の旅の一里塚が、十と数えるしかないと聞いては芽出度もあり、芽出度もなし、と感ぜられたかどうかしら

払うような焦燥はありながらも、本当の力精を欠く自分をみつめて、つく／＼『いずれの行もおよびがたき身』と感ぜられたに違ひない。聖人晩年の作にかゝる『自力聖道の菩提心、心もことばもおよばれず、常没流転の凡愚は、いかでか発起せしむべき』とある和讃は、この時の聖人の感じそのままではなかつたでしょうか。

五、六角の精舎

さあ大変です『いずれの行もおよびがたき身』から出る結論は一つしかありません。『地獄は一定すみかぞかし』がすなわちそれでありませう。人生唯一の目的を成仏にかけられた聖人の自覚に、事もあるうに地獄落ちが確定したとは、何たる悲愴ななり行きでしょう！あわれこの窮地から手を取つて引出してくれる知識もがな、とは絶望のどん底にあえぐ聖人の悲痛な、にもかかわらず、いともはかない叫びでありました。聖人が『あゆみを六角の精舎にはこんで、百日の懇念』をいたされたのは、この転機の最高潮に達したときであつたのです。

六、四条の橋

さて聖人は満願の日、汝の望がかなう時は今である、という『告げを五更の孤枕に得て』もどりを四条の橋にさしかゝつたとき、ゆくりなく出遇つたのが、かつて懇意の聖覚法印でありました。互に挨拶のことばを交している間に

法印は、聖人の顔色しやうすい、形容けいよう枯稿、泪羅なみだの岸をうろついた屈原くつげんよろしくといった容に目をつけて、時にお見うけ申したところ、大層おやつれの御様子でありますが、どこぞおわるいところでもありませんか、とたずねてみた。聖人はその親切に感謝しつつ、実はこう／＼でとつつまずありのまますを告げました。

七、吉水の会见

それはまことに御同情にたえない。どうです、ひとつ私の師匠、法然上人の許へおいでになってみては、上人ならばきつとあなたに安心の道をさずけて下さると思ひますが、なんならこれからすぐお伴してもよろしいです、と法印の切なすゝめを、渡に船とよろこんで、吉水の禅房に法然上人を訪ねる道をすがら、聖人の胸はあやしくときめいたのでした。観音の靈告や、今云った法印の言葉を思いあわせると、自分に、自分の機にかなう教を聞かして下さるのは上人を措おいて外にはない。上人こそ自分が今の今まで果敢はかないのぞみをかけていた大善知識に相違ない。聖人はこうした予感に勇みながらいよ／＼法印のひきあわせて法然上人にお会いする一段となったのであります。

何たる崇高な、凡そこの世にありうるかぎりの莊嚴な場面でしょう！このいと静かなる会見の席で親鸞の胸裏むねに点火された絶対他力の心光は、七百余年をへたてゝる今に、私ど

それはそれは随分いろ／＼と苦しんだもののなのです。

当時の仏教各宗の如きも、天台・華嚴をはじめとして、真言・仏心の諸宗から法相・三論にいたるまで、それ／＼深く立入って研究もしたのですが、要するに皆仏性を悟るということを目的とするものでして、はいつて行く入口こそちがえ落着く先さきは一つなのであります。どの宗にしましても説いてる教は幽玄高妙を極めたまことに立派なものばかりなのです。

が、如何にせん、私共の器量がそれとはとても釣合いません。經典を解し、行法を修するには、私どもの智力は余りに貧弱です。で、ここをこうして行けばいいというところがのみにこめていないのですから、これでは迷いを離れるたよりがない、とすると惡道へおちるにきまつてゐる、と朝から晩までそのことばかりが気になって、心配で／＼たまらないのです。何のことはない、渡に船を失い、闇に道に迷ったようなもの、氣ばかりあせつてどうすることも出来ないのです。

だといって、そのままじつとしても居られない、で、仕方がない、めげる心に鞭打むちうちちながらなお学習を続けて行つたのです。黒谷の法恩蔵へはいって一切経をひらいてみたことも一度や二度ではない、五遍までもやつたのですがそれでもまだ悟りの道がみつかりません。こうして悲歎の

もの上に直射しつゝ永久に限りなく胸から胸へとうつされて行くのであります。

法然上人は快く会ってくれました。先ず初対面の挨拶がすんでから、やがて親鸞は、何とはなしにかたじけなさの感かせめて、せぐりくる涙をおさえながら、自分の九歳入道のことから、二十九才の今日にいたるまでの求道生活のあらましを語つて、さてこういうして見ようのない私、何一つ取柄のない私であります、どうぞ今日から弟子としてよろしくおひきまわし下さいますようと、哀心あしんの希望を打明けたのであります。

八、法然上人の獲信

法然上人はこのとき六十九才の老体であつたのですが、今若い親鸞の口から、求道の熱烈さを聞かされながら、それを裏づける真剣さを、そのやつれた面、おとろえた容すがたにみて取つて、さながら自分の昔を見せつけられるような気がして、うた／＼今昔の感にたえないかに、やおら語り出されたようは、

『私も丁度あなたと似た経路を踏んで来たのです。今ではこうして安らかな日暮しをさしてもらっています、今あなたのお話をきき、あなたのお姿を見るにつけ、想い出すのは昔のなやましさです。私も九つの年に父に別れまして、その遺言で剃髪ていはつし、十五のとき叡山にのぼつてから、

なから寛束なくも、だん／＼研究の歩を進めて行くうち宿善開發の時節が到来したというものでありましょうか、特に善導大師の聖書に目がとまりまして、拝読するに従つて、私のような十惡の凡夫が仏に成れる道が説いてあるのに気づきました。まだ深い意味はわからないながらも、なんだか嬉しくて／＼ぞく／＼と身の毛がよだつように覚えまして、繰返し／＼三遍読んだのです、都合八遍よんだのですな！

その最後の回でした。観經散善義の『一心に専ら弥陀の名号を念じて、行住坐臥、時節の久近を問はず、念々してさる、これを正定の業と名づく、彼の仏の願に順ずるが故に』とある御文を読んだ途端、忽然として大師の御心に触れることが出来たのでした。あまりの嬉しさに、そばに聞いている人もないのに、私のようなしてみようのない者のため、阿弥陀仏は救いの法を五劫思惟の昔から、ちゃんときめておかれたのだ、と大声に叫ぶと同時に『感悅隨に徹り落涙千行』で、やるせないかたじけなさに涙がとどなく流れるのでした。

法然上人はまあかういう風にかたり出して、それからなお進んで教理の蘊奥に説き及ぼし、要するに如來選択の願心から信心をたまわる、往生之業、念仏為本、ただ念仏して弥陀のおたすけにあずかるの外はないと、淳々として仰

せられたのでありました。

九、親鸞聖人の入信

この時のありさまをしるした御伝鈔にはこうあります。
『建仁第一の暦、春の頃、隠遁のころさしにひかれて源空上人の吉水の禅房に尋ねまいり給いき、これすなはち世くだり人つたなくして難行の小路まよいやすきによりて、易行の大道におもむかんとなり。真宗紹隆の大祖聖人、ことに宗の淵源をつくし、教の理致をきわめてこれをのべ給うに、たちどころに他力摂生の旨趣を受得し、飽まで凡夫真人の真心を決定しましけり』と、まことに優雅な文で読むごとに莊重の気が側々として身に迫るように覚えます。親鸞聖人はこの時に信仰をいだかれたのであります。教行信証にも『然るに愚禿釈の鸞、建仁辛酉の暦難行を棄てて本願に帰す』とあるのによって明かでありま

す。
只今お話しました法然、親鸞両聖人の対談の模様は、実はおゝかた私の想像になったもので、これという典拠がある次第ではないのですが、しかし私は確信しております、話の前後、順序にこそ違いはあれ、要素、内容に至っては似たものであったらうと、のみならず法然上人の談として挙げられた大部分は聖覚法印が上人から真にきいた、上人入信の体験をしるした文の意訳でありまして、上人は必ず

尾いて行くことが出来る。法然上人の体験の多くは、親鸞聖人にとってはひとごとではない。わがことであつた。かつて自分の体験した、若くは現にしつつあることであつてそれはいま上人の告白を共感するに不足ならない資料であつた。今まで廃物として顧慮されなかつた過程が、信仰を築きあげる要素としてよみがえつた。

師と仰ぐよき人の一言一語が、聖人の身にしみ、髓に徹り、内臓に刻まれる思いがあつたのは、もとより当然のこととて、聖人が『本師源空いまさずば、このたびむなしく過ぎなまし』と感謝しつつ、上人は或は勢至、或は弥陀の化身と仰がれたのも、また怪むに足らないのであります。

十一、さればただ一つなり

随伴する人は案内する人のうちに、先達は後進のうちに生きた。聖親鸞の持合わした煩惱罪障の水は、聖法然の念仏無碍の光にとかされて、師弟一味の菩提の水となつた。この意味において、親鸞は法然となり、法然は親鸞となつた。後年聖人が『善信が信心も、上人の御信心もひとつなり』と言われたのが相論のたねとなり、結局その子細を恩師に申上げて、上人の『源空が信心も如来よりたまわたりたる信心なり、善信房の信心も如来よりたまわらせたまひたる信心なり、されば一つなり。別の信心にておわしきさんひとは源空がまいらんずる浄土へはよもまいらせたまひそう

親鸞聖人にも、互の体験を問いつ語りつ語されたに違いない。従つて私の想像も大体において正鵠を失してはいない

と信じます。

智慧光のちからより本師源空あらわれて、

浄土真宗をひらきつつ選択本願のべたまう。

聖人の法然上人に対する態度は、子の母をおもうような渴仰に基礎づけられていた。今や聖人の心の内は、進展に役立つべき何物も蔵していない。二十九年の体験によって綺麗さっぱり掃除されてしまつた、真に無一物となり、言葉通りカラッポであつた。願わくば上人の垂示を以てこの空虚をみたしたい、聖人ののぞみはこの一点に集中した、かう云う次第で、一面、よき人と仰ぐ信頼があり、他面、虚心恒懷、先入主となる自見が存在しない限り、上人の所感はそのまま聖人のそれとして受けいられるのは、けだし心理的必然の経過でなくてはならない。

十、体験と告白

しかのみならず、上人は告ぐるに自己の体験を以てした単に法文によつて教理を説く、所謂説教というよりは、むしろ信仰の告白であつた。説教は概していえば、地図を開いて目的地点を指示するようなものであるが、告白に至つては、自身がさきにたつて案内するようなもの、聞く方にもし同様の体験があると、歩調を合わせて案内者のあとに

らわじ』という判定を請うに至つたというのとはよくこの間の消息をあらわした逸話であります。第二章の終りに『弥陀の本願まことにおわしきまば、釈尊の説教虚言なるべからず、仏説まことにおわしきまば、善導の御釈虚言したまうべからず。善導の御釈まことならば、法然の仰せそらごとならんや。法然の仰せまことならば、親鸞が申すむねまもつてむなしかるべからずさうらうか』とあるのもこれまた同一信心の告白に外ならないのであります。

『親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとの仰せをこうむりて信するほかに別の子細なきなり』とは、聖人がこの際、師の上人の信仰と同一鹹味にとけ合つた刹那の心的事実であります。聖人は恐らくその席上、不可称不可説不可思議の感にうたれて、至心信樂、口をついて出る念仏に『感悦髓に徹り、落涙千行』のおのれを見出されたことであつたらう、と思うのであります。

しかしこの心的事実の告白が、実に第二章の骨子を形作つているのであります。従つて第一章とはおのずからその趣を異にしている。第二章が心的過程の記述であるならば、第一章は心的現象の観察であり、前者の主観的、具體的、特殊なるに對して、後者は客観的、抽象的、普遍的であります。第二章の主格は『親鸞におきては』即、私で

あり、第一章のそれは、凡そ人であります。もつとも第一章とても単に空に、たとえば教典の上から割り出した原理ではない、自家直接の体験を一般的に言い現わしたものと見るべきであるから、実質的には第二章と変らないのであるが、形の上から自然に異った印象を与えることとなるのであります。

十二、信仰と念仏

先年、私が岡山に居りました頃、大阪の婦人で信仰を求めつつあった人が、或人の紹介で私を訪ねて来られた。その時私はどんな話をしたか、今覚えていないが、一応何か話をした後、その人の帰る時、これをよく読んでごらんさいといつて歎異鈔を渡しておいた。ところが四五日してまたその人が見えた。そして云うことには、私は数年来たび／＼聞法したにかかわらず、どうしても念仏が生まれませんでしたのに、先日お話を承ってかえてから、よう／＼出るようになって来ました、というので、それはまたどうしてですかと聞いたたら、この三四日というもの、専ら歎異鈔第一章をくりかえし／＼読んでるうちに、自然と念仏が称えられるようになりましたというのです。

兎に角出なかつた念仏が出るようになったと聞いて、私も一応喜びはしたものの、なんだかもうそれでいいのかしら、どうも怪しいと思ったのですが、その後の様子から

すれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり、さればそくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」という御持言であります。これが即ち憶念の心であります。このかたじけなさの思いに湧く念仏がほんもので、自分の称えることに価値をつけて、或目的に用立てようとする念仏は、にせものであります。所謂自力の称念としてきらわれるのであります。何のはからいもまじわらない、順彼仏願故、即、本願に相応した、如来選択の願心に順応したのでなければ本當の信心の念仏とは云えないのです。

十三、ただ念仏

選択の願心ということについては、いずれくわしくお話する機会があろうと思いますが、今はただ法然上人の選択集の一節を引用するだけにとどめておきましょう。

『若し夫れ造像起塔をもて本願となせば、すなわち貧窮困乏の類は定めて往生の望を絶たん。然るに富貴の者はすくなく、貧賤の者は甚だ多し。若し智慧高才をもて本願となせば、愚鈍下智の者は定めて往生の望を絶たん。然るに智慧あるものは少く、愚痴の者は甚だ多し。若し多聞多見をもて本願となせば、少聞少見の輩は定めて往生の望を絶たん。然るに多聞の者は少く、少聞の者は甚だ多し。若し持戒持律をもて本願となせば、破戒無戒の

見ると、果してまだ本統の信心になっていない。称えるということにイヤに力味のはいつた念仏であったのでした。それはそのはず、内的体験と呼応しての信樂の開発ではなくて、第一章の文句を型として、ただその型にはまろうとするはからいだけだったからです。で、その人はその後ながらくその型から出ることが出来なかつたようでした。

『眞実の信心は必ず名号を具す、名号は必ずしも願力の信心を具せず』本統の信仰がただければ、念仏が出ずには居ない。念仏が出ないようでは、てんからお話にもならないが、念仏が出るからといっていきなりそれでいいのだとは断じられない。念仏にはや／＼もすると意識的、無意識的なになかとはからいのつきたがるものです。そうした念仏に限って称えるのになか／＼骨が折れる。称えてもさっぱり有難味がない、むしろ苦行でも修するか之感がする。

弥陀の名号となえつつ信心まことにうるひとは
憶念の心つねにして仏恩報ずるおもいあり。

このおもいが伴わない念仏ではいけないのです。憶念の心というのは、第十六章の文をかりていえば『たたほればれと弥陀の御恩の深重なることつねにおもいいだしまいらす』心であります。聖人がよきひとの仰せを信じた刹那、内臓に刻まれた文句が『弥陀の五劫思惟の願をよく／＼案

人は定めて往生の望を絶たん。然るに持戒の者は少く、破戒のものは甚だ多し。自余の行もこれになぞらえてしるべし。まさに知るべし上の諸行等をもて本願となさば往生をうるものは少く、往生せざるものは甚だ多し。しかれば即ち弥陀如来、法蔵菩薩の昔、平等の慈悲に催おされてあまねく一切を授せんがために、造像起塔等の諸行をもて往生の本願となさず、ただ称名の一行をもてその本願となすなり』

往生極樂の行を定めるについて、老少善惡を問わず、一切の罪惡深重、煩惱熾盛の衆生を救わんため、布施、持戒忍辱、精進から孝養父母、奉事師長までを選び捨てて、ただ念仏だけを選び取ったのが如来選択の願心でありましてこのお心が、内、肝に銘じ、随に徹つて、外、声に出たのが『ただ念仏』なのであります。

聖人が、自らも信じ、人にも信じさせたい、自分の体験を人にも体験せしめたいと望まれるのは、このただ念仏の一つであります。ですから、わざ／＼関東からたずねてきた同行に対しても、あなたがたが東の空から、はる／＼と都に上つてこられたのは、救いの道をきこうがためであるうが、私はただ念仏のほかなんにも知らない。めずらしい法文でも知りたいなら、奈良や叡山あたりの学問にすぐれたかた／＼におたずねなさるがよい。私はただ師の仰せを

そのまま信じているだけなのです。とただこう仰せられたのであります。

ところで、さて、皆さんはどうですか？聖人の告白に共感して、そのまゝお信じになることはできませんか？

『この上は念仏をとりて信じたてまつらんと、また捨てんとも面々の御はからいなり』聖人は決してわすめはなさいません。一寸きくと縁なき衆生は度し難しと、軽く突き放されたような、さりとて情のうすい仕打ともとれるようですが、聖人のこの思いきりのよい言葉の裏には、

一方自分のはからいで、人に念仏を申させることは出来るものでないという確信と、他方、弥陀のおもよおしのお手篤さの期待があるからです。丁度『地獄におちたりともさらに後悔すべからず候』という思い切りのよい言葉の裏に一方『地獄は一定すみかぞがし』の確信と、他方弥陀のおはからいにまかせまつる心安さがあると同じように！おたがい、どうぞこの聖人の御期待を、空うしまつらなようにしたいものであります。

「信を行く旅人」より

覺者の救いの目当は、ハテ何者であつたろう？智者であつたか？善人であつたか？いやいや愚者であつた。悪人であつた。それにもかかわらず、智者になり善人になったような気がしたときは、救われたような気になり、愚者となり、悪人となったときは、救いから洩れるような気になるおろかしいことだ。

口伝鈔に曰く「然るにわが心凡夫げもなくばさては我凡夫にあらねばこの願にもれやせん、と思うべきなり。然るに我等が心すでに貪・瞋・痴の三毒みな同じく具足す。これがためとて起さるる願なれば、往生その機として必定なるべしとなり」

何回となく読みかえし、読みかえしすればするほど、いよいよ味わいの深くなるのを覚え、かつ我が身の幸を喜ばずにはいられない。私はおろかであつたことが、またとなくありがたい。私は悪人であつたことがまたとなくありがたい。

おろかなる身こそなかなか嬉しけれ弥陀のちかいにあうとおもえば
良寛詠

近角先生に別れまつりて (三)

白井成允

近角先生の御生涯は至誠を以て一貫されていたとは先生を知る総べての人々の感ずる所であらう。今の会館の建つた頃、朝日新聞に次のような事が書かれてあつた。

先生が久しく旧のあつた古屋で法を演べて居られた御姿を見るに堪えず、柳沢博士等、先生の親友の方々が発起して今の会館の建築を思いたたれ、その事にとりかかって、一般から資金の喜捨を求めることになった。先生はそれを感謝されながら、而も御自分では嘗て一言もこれに及んだことがない。建築委員の方々は、先生が地方に講演に赴かれる毎に、先生に頼んで会館建築の趣旨をその他の人々に告げ資金の助力を仰ぐようにと請うた。先生はこれを肯いながら、何時も唯一途に信仰を説くのみで、嘗て会館の建築について語ることがなかった。そして帰京してから、これを語るのを忘れてしまったからと云って謝して居られた。そのため委員の方々も先生を頼んでいては何時できるか、的も無くなったので、もう先生にお頼みするの

を断念してしまった。

朝日新聞の記者はこれを記して後に、何という純粹清浄な話であらう、というような感歎の語を以て結んでいた。想い出しても清風に吹かれる感がある。

先生は大学に学んで居られた頃から、既に仏法弘布の念に燃えておられたのであらう、そしてその御志に立つて御卒業後、いよ／＼盛んに諸方に道を説れたかったのであらう。それが半途にして痛切比喩なる罪惡感に打たれ、心身を挙げて懊惱苦痛の極におちいられた。然るにその結果、たまたま如来のやるせなきお慈悲の大光明に触れて心身頓に救われ、念仏成仏の真宗に徹到せられたという。此くの如き深刻なる宗教的体験によりて先生は御身を以て阿闍世王の入信を味わい、韋提希夫人の懺悔を識り、親鸞聖人の信樂の秘奥に到り、如来の大願海に帰し、其処に獅子奮迅の勢を以てあまねく世間を覺醒せしめたまうた。先生の入

信の歷程は『懺悔録』に詳かに述べられている。此書は小さい冊子に過ぎないけれども、道徳乃至宗教を己身に省みんと欲する者の必ず深く味読するを要する、貴い人生の記録である。此書のみならず『歎異鈔講義』（これは惜しいことには誤植が甚だ多い書であり、前九章に止まっている。後に信界建現に発表された後九章の「愚註」と併せ、速に世に公刊せられんこと願わしき限りである）でも、『親鸞聖人の信仰』（これは教行信証の要旨を述べられたもの）でも先生の御著は、先生の御法話をそのままに筆に表わしたものと謂うべく、先生の信仰の実験と祖聖の教語と肝胆相照らして真に如来の本願に撰取せらるる人生の秘義を顕彰して下さるものである。私は先生の御遺文が速に編集せられ殊に御書簡の類（これは極めてありがたく尊いものに違いないのであるから）が散逸亡失しない間に早く集められ、世に公にせられんことを冀うて止まない。

○ 求道学舎に学生を育くみ、求道会館に信徒を導き、これを中心として先生の徳化は深くかつ広く世間に及んだ。先生は如何なる場合にも、ひたすらに如来大悲の恩徳に感激する純粹至誠の一念から働かれたのであって、その勢は、恰も千丈の瀑布が巖頭から落つるが如く、抑えることも、どうすることもできず、唯これ如来の爲さしめたまうところ

宗門の根本法にかかわるものの三である。私は今此等各について事実をここに記そうとは思わない。それはいずれも世間にあまねく知られたる事であり、然しその事の詳細はまた余にも知られざる事であるし、且つ私もかかる世間の事象について真摯に根強く活動された所以は、それらがいずれも或は国家として、或は宗門として、先生の如来から廻向され在します根本信念に照らして真に道に背き、義に違いたることであり、これを實にする事から生じ来るであろう悪果は国家と宗門との将来の発展の上に大なる禍をもたらすであろうことが予見せられるからである。其処にはただ国家を憂い宗門を愛される純粹の一念のみありて、いささかも私を存せざるところ、先生は不断に白玉の無垢なる如くに輝き、身命を賭して働いて下されたのである。

○ 吾等の祖先は、聖徳太子の敏き智慧、深き慈悲の御守護の中に仏法に育まれ、仏法に於いて生死の帰依する処を知らしめられて、この光輝ある歴史を織り成して来た。真に善く皇国の国体の真意義を顕彰し、真に嘉く永遠の孝を奉行し得ているもの、仏法を描いてこれを何れに求め得よう仏法に充たされた処にこそ日本民族は始めてよくその欠達の生命を開展し使命を遂行することができる。そのために外道に頼るいささかの必要もない。否、外道に頼ろうとす

るを爲し、如来の遣らしめたまうところを遣つて、動静おのれに非ず出沒必ず由あり、と謂う性質のものであった。この如く如来の昭々たる威光を蒙り敵命を畏みて爲さるる先生の進退行動は、たとい事に於いて先生と反対の立場に立つ人々と雖も、これを敬い畏れざるを得なかったであろうし、或は先生のこの至誠に打たれておのれの驕慢の矛をひるがえした者もすくなくはなかったであろう。明治・大正・昭和の三聖代にわたって先生の致された感化は深く大きく全く測ることが出来ない。

○ 先生は世間的、政治的、社会的活動を爲そうとは固より欲せられず、其等一切の活動の根源となる処を清め、それによって其等の汚濁が自然に去り逝かんことを念じて居られたのだと謂つてよいであろう。然しそれはもとより世間悉く濁り、我れ独り醒めたりというような独覺者流の昂然たる我慢の念なのではない。かえって一切世間の罪惡を己れの罪惡として荷負し、ただ如来の威神力を蒙る事によって能く自然に不請の友となつて働かるるばかりである。その働かるるところ、国家のため、宗門のため、貫徹せねば止まない勇猛精進力に充たされておられたのである。

この種の御活動として私の記憶に止まるものは宗教法案にかゝわるもの、ローマ法王庁使節にかゝわるもの、及び

○ ローマ法王庁の使節を東京に常駐せしめるについての費目の予算が議会に提出されたのを否決せんと欲するもの、外見小事なるが如くにして実は重要な意味を含んでいる。カトリック教はローマ法王を中心とし、その強烈なる宗教を通じて、世界を支配せんとする力である。（私はローマに遊んだ時、基督教の古代ローマ世界支配が奇蹟と殉教の血とによって爲されたものであることを見、古き法王の宮殿の地下室は異教徒を囚へたる幾十の石牢獄であることを見、法王庁に属する伝導博物館……これはカトリック教の弘められている世界各国の国民間に信ぜられている宗教の習俗をその種々の尊像器具等を以て知らしめる広大なる組織のものである……この博物館の大廊下の上壁に広大なる世界地図が描かれ、その表面にはカトリック教の伝導の現勢が一目瞭然と記されてあることを見、眠れる仏教徒の現状に比べて覺えず長大息を禁じ得なかった。カトリック教はかつて中世の歐洲を支配したように、将来世界を支配せんと志している強烈なる力であることを吾等は思わなければならぬ）その力を東亜に延ばそうとする根拠地を東

京に置く企図がこの問題の要点なのであった。吾等今日の日本民族は宗教の問題について比較的淡泊であるから——この現実については別に深き反省と正しき評価とを要することであつて、今ここに云い得る限りではない——この問題を軽視した傾があるけれども、先生の如き透徹せる心眼には事の始終が明瞭に識られる。それは国家千年の将来に對して深き憂を残す所以と悟られる。これ正に先覺の士の黙して止み得ざる所であつた。先生が挺身この企図をはばむの舉に当たられたのは此くの如き御氣慨からであつたかと思われるのである。

更に宗門の大事にかゝりては、事既に収まりて先生の御志が十分に貫かれてゐる今日何も云うを要しない。ただ先生は此については功利的思惟に出發する百千の利害の計量をすべてしりぞけ去つて、唯一つ吾が国民道德の精髓を成す忠孝の一道の損を顧みざるを默視することが出来ず、もし真宗の宗門自体がこの道義に背くが如き事を遂げて恥じないならば、それは宗門として存在する意味もなく、国家のためにむしろ大なる禍の源たるのみ、まさに亡ぶべきものたるを見られたのであらう。宗門自体が道德的に國民を導かなければならない。この永遠にして重大なる任務は、宗門の我執自力から強いて自ら課する所ではなくして、真に如來の本願他力に攝取せられたる者の自然の覺悟である。

告げられしこと何という幸慶であらう。

先生の御晩年十年間は全く病牀に起臥せらるる御身であられた。そしてその間に先生に取つて極めて悲痛なる事が続き起つた。宗教法案の議會を通過した事と令嗣の戦死せられた事である。此等公私二事について先生の御感懐は如何のものであつたであらうか。私は遠く朝鮮に住みて先生に御目にかかる機も極めて稀であり、又御目にかつても直ちに其の御感懐をお伺いする氣になり得ず、唯黙して先生の御胸中をおぼろげながら想ひ見まつるに止つた。私は上に先生の純粹に至誠一貫の性にあはるるを述べた。然し同時に私は先生が寧ろ煩惱の塊とも云うべき情熱の性であらるるを思うものである。先生に於いて強烈なる煩惱が如來の慈光に照らされて熾々として輝き照らし出であられたのである。煩惱そのまゝに生きながら其の一言一行挙げて如來願海中に游泳する不思議の徳を華かしめられたのである。先生が病牀半夜靜かなるとき令嗣を想ひて注がれたであらう万斛の涙は即ち直ちに念仏の大海水となり、逍遙として君に殉ぜられた忠義の土と共に、興に無碍の光明土に遊ばるる緑となられたことであらう。

こう書いてみると、私が嘗て上京した或る日曜會館へ参つた時の事が想ひ出される。常音先生の御法話が終つた後

この覺悟に住する所、国民道德にもとる危険事を、如何に種々なる利害の複雑なる計量から或は正しいと思われるような事であると云つても、これを許容することのできるはずがない。一切道義の本は極めて單純である。その單純なる一点が見えるか見えないか、これ如來廻向の信眼の真に開かれてあるか否かの試金石だと謂つてもよいであらう。先生は先生の明燦々たる信眼によつてこれを照破し、唯獨り宗門の大事に邁進し、破門を凌いで、遂に大綱を維がれたのである。

此等社会的諸問題に係わる先生の御活動は孰れも先生の信の自然の迸出なのであつて、唯だ仏の威神力の然らしむる所、先生に於いて止むに止まれぬ勢の事であられた。此は然し此くの如き公の事についてばかりでなく、小さい私の事についても、常に一貫する所であり、近くは私自身の身辺の些事についても、先生の測る可からざる切々たる喪慙の御情の注がるるを覚えて感泣せざるを得ざりしこと再三ならず存した。思うに此くの如きは先生に教を請うた老少男女幾万の人々の共に感ずる所であらう。先生は公私一切の事について、即ち其の御生涯の行藏に通じて、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらせ、眞實信心に貫かれて在りました。此くの如き純粹至誠の師は世間まことに稀有である。此の稀有の師にはしなくも値ひ奉りて信を聞き教を

に、先生は応接室の扉から現われてこられた。不自由な御身を杖にもたせられ、令室と令嗣とに附き添われ、老い且つ病みて痛ましかるべき御身であられながら、其の白鬚の御面には和かに温かな光明がただよい、其の御姿には安祥たる滲氣が包んでおられる。御仏座の前の台に昇られるとき、令嗣の力こもれる御介抱を顧みられる御微笑に、私は覚えぬ念仏し敬礼したことであつたか、渚根悦予とはかかる御相なのであらうかとも思われた。

台湾に住まわれる山下成一法兄は、遠方に居られながら屢々上京せられ、上京の毎に親しく先生に見えて御教を蒙られた幸慶の士であられる。去年の暮にも此の幸慶に充ちた数週間を送り、屢々日曜の御法座に侍り、然も其に縁りて同時に先生の最後の御德音にも接し、忽ち御示寂の悲みに遇われ、御後の勤めを尽くされたとのことである。法兄の御示しによれば、先生の御最後は極めて安祥として、平常の如くに、眠り去られたとの事である。愚息成徳亦甚深の法恩を蒙りて現に学舎に育んでいただいている。先生の御往生の朝、学舎を出でんとしたとき令室に御目にかつたのであつたが、平常の通りの御様子であられたので、何も氣着かず、学校から帰つたとき始めて御往生の事を知つて驚いたとの事である。思うに先生の御終は念仏無碍の光明の照らすところ、此世と彼世との界もおのずから撤せら

れて、ただ安祥として涅槃界裡に赴きたもうたのである。

○
此くの如くして近角常観先生は此世を去りたもうた。私にとり、私の妻にとりて、廻心の機を恵みたもうた恩師、真宗宗門にとり、日本国民にとりて永遠に忘るべからざる導師、如来の慈光を高く掲げて遍く世間を照らし浄めたも

観無量寿経講話(二)

釈尊と韋提希

「韋提希がまだ頭を上げ切らない内に、釈尊は耆闍崛山にあってその切ない心内を見通され、直に目連・阿難の二人に命じて空中より王宮に飛んで行かせ、又世尊自ら耆闍崛山の会座よりその姿を消して王宮にあらわれ給うた。その時韋提希が礼拝を終えて頭を上げると意外にも世尊を目のあたりに見奉った。その気高い御身は紫金色のようにまばゆく輝き、百宝の蓮華の上にお坐りになり、目連尊者は左に阿難尊者は右に付き添っておられた。そして梵天・帝釈などの護世の神々は虚空よりひ

ちまちの内に空中から飛んで行かれるとありますが、先にも申します通り、韋提希夫人という方はかねて釈尊やお弟子達のみ教をしんから我が身の上に聞いておった方でありますから、いよく絶体絶命という時になると、そのかねて聞いておられたところの釈尊のみ教、それから目連尊者・阿難尊者なんかのみ教というものが今更のように生き生きと自分の心の中に浮かんて来た。こういう風に受け取って見たいと思うのであります。

そうして今の御三方が見えますと、「自ら瓔珞の紐を絶ち切り」、こんな物はいらぬという風で身の飾りである瓔珞の紐を切ってしまった、そして世尊の足許に身を投げ出してよよとばかりに泣き崩れ、世尊に向って申し上げるには、もうすっかり何と云いますか、愚痴の人間になってしまったって世尊の前にすっかり泣いてしまふ。そして「どういう事で私はあの阿闍世と云うような者を生んだのでありましょうか、又どう云う因縁であの悪い提婆と云うような者が世尊の御親族関係になっているのでしょうか。」まあ愚痴でそういう事を云いますのであります。だからかねては韋提希夫人は相当に賢い人であったのでありましようけれども、こうなつて来るとすっかり愚痴になってしまつて、世尊の前で泣き崩れてしまつて愚痴の限りを云う、こう云う事になったのであります。

うた法師、今は既に極樂界裡に妙果を証し、還りて復此の土に來りて法雨を滂ぎ法音を演べ法化を布いて吾等を御誘いくだされておられるのである。私は生を更えても先生の法恩に浴せる幸慶に念仏もうすばかりである。

此に先生に別れまつりて感懷の一端を記し以て自ら省みるの資と為そうと欲うのである。

昭和一七、五、二六発行

福島政雄

としく華をふらせて世尊を供養していた。韋提希はこの神々しい世尊の御姿を拝して、自ら瓔珞の紐を絶ち切り世尊の足許に身を投げ出してよよとばかりに泣き崩れ、世尊に向って申し上げるには、『前世に何の罪があつてこんな悪い子を生んだのでしょうか。そして又申すも恐れ多うございますが、あなたもどうした因縁からあのような悪い提婆と親族の関係を結んでおいでになるのでしょうか。』

ここで韋提希夫人の所に釈尊も目連尊者も阿難尊者もた

仏典と女性

これから先は、この愚痴の韋提希夫人が釈尊のみ教によつて救われると云う事になるのであります。こう云う事をお考えになりませんか。仏教の色んな經典の中に色んな女性があらわれてまいります。聖徳太子が推古天皇の前で御講釈になったというあの勝鬘經であります。勝鬘經の中心人物は、勝鬘夫人という何とも云えない非常に賢い人でもあります。そして両親の教をしんから身に受けて、結局釈尊の前で十の大きな願を立て、又三つの大きな願を述べるといふことになっている非常にすぐれた女性であります。それから華嚴經を読んでみますと、中に善財童子というのが次から次へと五十三人善知識をたずねて教を受けるといふ事になっておりますが、その善知識の中に何人も女性があらわれて来るのであります。そして一番終りに近いよいよ仏陀の悟りの世界のすぐお隣ぐらゐのところまで悟りを開いておられるのが摩耶夫人という事になっている。その摩耶夫人が善財童子の五十一番目の善知識である、そんな事が出ております。随分すぐれた女性を出しております。或はやはり聖徳太子が御註釈になった例の維摩經では釈尊の第一のお弟子と云うべき舍利仏が天女からさん／＼からかわれてどうにもならなくなる面白い所を書かれてあります。色々そう云うすぐれた女性と云うものを色んなお

經に出されてありますが、問題はそう云うすぐれた女性はすぐれているからそのまゝでいいかも知れない。ただ人間が絶体絶命の境に陥って愚痴だらけの者になる、こういう事になったその時に釈尊の救いと云うものが本当に深い救いという事になる。

その愚痴を代表しているのが韋提希夫人であり、韋提希夫人が救われると云う事は一切の女性が救われるという事になる、のみならず一切の女性が救われるという事は一切の男性が救われるという事にもなる。こう云う意味で、愚痴の限りを尽くした韋提希夫人が釈尊の前で身を投げて泣いているこの姿というものが、本当はよそごとで無い、私共と直接の問題になるのであると云う事を思いますのであります。

去此不遠の仏

そこで御承知の通りに釈尊は韋提希夫人に阿弥陀仏の浄土をお見せになる。韋提希夫人はこの浄土に生れたいと云うことになる、そして其処で救われて来る。釈尊の御言葉として「あなたは知っていますか。阿弥陀仏はここを去ること遠からず」と、あの有名なお言葉がありますが、ああ云うお言葉から始まって韋提希夫人が救われて行く事になりますのでありますが、併しそこ迄の事について大いに考えなくちゃならん問題がありますと思うのであります。

こわいものですからそんな子供が生れては大変だと云うので、生れたばかりの赤ん坊を高殿の上から死んだらいいと思って落した。ところが死なずに指一本折っただけでだん／＼大きくなった。それが阿闍世である。だから阿闍世は父親に対してはまだ生れない前から怨みがあるのである。こう云う事を御註釈に云ってありますが、サアそう云う事があるものだろうか、第一仙人が死んだら今度は王の子供として生れて来る、そんな事は私共あんまり信用は出来ませんのであります。

それから韋提希夫人も母親として生れてすぐの子供を高殿から落とす、そんな事が一体出来るだろうかと云う事を考えますし、非常に極端なありさうにも無い事を書いてあると一応思いますのであります。

なお涅槃經をしらべて見ますと、仙人が死んだら王の子供として生れて来るから王が早くその仙人を死ねばいいと思われたこと、そんな事はちっとも出ておりません。涅槃經を読んでみますと、王様は山に狩りに行かれた、ところが何も獲物が無かった。それからその山の中に仙人が住んでいる、あの仙人が何か術をやったから何も獲れなかったと云うて怒って、その仙人を殺したと云う風になっておりまして、その仙人が死ねば今度は王の子供として生れて来る、そんな事は出ておりませんのであります。

その問題にはいりますがちょっと休憩させて頂きます。

觀經疏の問題

そこでこれから少し私の考えたり感じたりします事を申して見たいと思います。第一私が考えます事は、こう云う事は実際あった事実だろうか、どうもそんなひどい事があつたのだろうか、と申しますのは、お聞きになっております通りに、この阿闍世が生れた時にピンバシヤ王のはかりの子供を高殿の上から落ちて死ねと思った。一体そういう事があるものだろうか、母親としてそんな事をするものだろうか、こういう事を考えさせられます。どうもそれはあまりにひどい。又そう云う事は成る程善導大師がこの觀無量壽經の註釈をお書きになってありますその中に、ピンバシヤ王が非常に子供が欲しかった、ところが占いか何かに聞いてみようと、どこそこの山に仙人がいる、その仙人が死ぬると今度は王様の子供となって生れる、こういう事を聞いて、家来をつかわしてその仙人に死んでくれないかと云わせたけれども仙人はなか／＼死のうと云わない。それだから結局誰かをかわしてその仙人を殺させてしまった。その仙人が殺される時に、「王様は人に云いつけて自分の命をとってしまわれた、そのかわりに自分も王様の子供に生れたら今に自分も人に云いつけて王様の命をとりますぞ」と云うような事を云って死んだ。だから非常に

それならその話はどこから出て来たものか善導大師の御註釈にはそんな風に書いてありますが、それはあまりにひどい事である、一体この世の中でそう云う事が行われるものか。だん／＼そういう事を考えていましたが、私の心にふと浮かび出ましたのが昔のギリシャの伝説であります。

オイディプスの伝説

その伝説と云うのは、オイディプスと云う人についての伝説であります。そのオイディプスと云うのはギリシャのデーバイと云う国の王子として生れたところが、やつぱり占師が云うには今度男の子が生れてその男の子は大きくなると自分の父親を殺して自分の母親と結婚するようになりますと云うものですから、父はびっくりして生れたばかりの赤ん坊を山の中に捨てさせるのであります。ところが捨てられた赤ん坊を羊飼いが拾い上げてコリントと云う国につれて行く。そのコリントの王様が子供が欲しくて／＼堪らんけれどもどうも子供が生れない。そこへ今の拾われた赤ん坊を連れて来ましたから非常に喜んで自分の子として育てる。その子供、それがオイディプスと云う名であります。そのオイディプスが十八才位になった時にデルポイと云う所にいるアポロンの神、このアポロンの神様と云うのは光の神、智慧の神であります。そのアポロンの神様の所にはその頃ギリシャ人は自分の力で決断がつかないこと

があるとそこにお参りをして、神様のお告げを聞いたものだそうであります。それが今の十八才になった青年オイディプスがそのデルポイのアポロンのお宮にお参りして、神様のお告げを聞いてみると、お前は今に自分の父親である王を殺して、自分の母親である王の妃と結婚するような事になると云うお告げがある。それからびっくりして、これは大変だと。自分はコリントの王の子供だと思っております。これはコリントには帰れぬ、とんでも無い事をしてはいけないと考えて、旅行してまわります。けれどもその旅行の途中本当の自分の父親が馬車に乗ってやって来るのと出会って、何かの事で喧嘩を始める。そして自分の父親を殺してしまふ。それからついていた家来も一人だけ逃げたけれどもあと二三人殺してしまふ。それから自分の本当の生れた国テーバイへと行くのでありますが、そのテーバイの国には大変な化物が路傍にいて人に謎をかける。それを解いてくれないとその人を殺してしまふ。スフィンクスと云う化物であります。顔は女でありますか、体は翼のある獅子、という化物であります。それがどう云う謎をかけるかと云いますと、朝は四本足で歩いて昼になると二本足で歩いて晩になると三本足で歩くのは何かと。その謎をかけられて誰もその謎を解く事が出来ない。何人も／＼そのスフィンクスからとり殺されてしまふのであります。とこ

あなたは今王様でありますけれども、前の王様、あなたのお父さんをお父さんと知らずに殺しております。そして今のお妃、実はあなたのお母さんと知らずに結婚しております。そう云う人間としての道ならぬ事が行われているから、この国に禍が次々と起こるのであります、と云うことを云う。それからその王は非常に苦しむわけでありまして。そう云う事であったか、ああ自分はこの国におる事は出来ない。又その事がわかると母親は奥の方にはいつて首をくくって死んでしまふのであります。そうするとその母親のかんざしのようなものでありましよう、それで以て自分の両眼をえぐって、自分はこの世の中を見る資格も無い、この国にとどまっている資格も無い、自分を追放してくれと云う。それでさあ、自分の娘であるけれども妹でもあるというわけでありましよう、アンチゴーンと云う娘につれられて国から国へと廻って、おしまいにアテネの郊外で死ぬると云う事になります。

精神分析の説

これがまあ昔のギリシャの伝説でありますか、ところがもう大分前から精神分析と云いますか、オーストリアのフロイドという人が始めましたところの精神分析学でこう云う事を云っております。我々人間は心の中に病的な滞りを持っている、その病的な滞りをこのオイディプスの

ろが今のオイディプスがそこへ来て謎を解いたと云うのであります。それは何でも無い、人間だ。人間は赤ん坊の間は四つばいである、大人になると二本足で歩くけれども老人になると杖をついて三本足で歩く。それは人間だ。当たったものでありますからスフィンクスはその場で死んでしまふ。それで御存知であります、この人生をスフィンクスの謎だとよく申しますのであります。ところがオイディプスはこのテーバイの国にはいつて行く。テーバイの国では今迄皆が困っていた化物を退治してくれた、これはどうしてもこの国の王様になつてもらいたい。と云うのはこの国の王様はどこかへ行つてしまつて帰つて来ない。殺されたらしいから王様になつて欲しい。そして王様のお妃が居られるからこれと結婚してもらいたい、母親であります。が母親と知らずに結婚をする。そうするとその後テーバイの国には禍が相次いで起こる。疫病がはやる、穀物が稔らない、非常に不順な天候が続く、と云うような事はばかり起る。それで王様になつたオイディプスは非常に心配して、どうしてこう云う禍ばかり起こるのであるかと又易者を呼んできくのであります。そうすると、私にはわかつておりますけれどもとても申し上げるわけには行きませんと云うのを無理に責め立てて云わせますと、その易者が、実はこの国には人間としてあるまじき事が行われております。

心のとどこおりと云うのであります。このオイディプスの心のとどこおりとは何であるかと云うと、一人人間と云うものは生れてすぐから、男の子であれば自分の父親を殺して自分の母親を自分のものにしたいと云う心持を持ってこの世に生れてくる、女の子であれば反対で、自分の母親を殺して自分の父親を自分のものにしたいという、そう云う心持をもつてこの世の中に生れて来ると。そう云う、まあ学説としてフロイドと云う学者がとなえていたのであります。

さあ、そうなつて、若しフロイドの説を取り入れるならばどう云う事になるか。阿闍世王のような事はまさかの場合には起こつて来る。我々人間はみんなそう云う何とも云えない罪を造るその心を生れた時から自分の心の中に持つて生れて来る。そうなれば阿闍世王とピンバシヤ王とのああ云う関係というものは起り得る事だ。起り得る事はよそ事じゃ無い、私共の問題にははしないか。

反省すべきこと

こう云うところ迄迫つてまいります。そうすると観無量寿経のこの序分というものは、私共自身に、ただ阿闍世王の物語ではなくて、私共自身めいめいの心の底にそう云う恐ろしいものが潜んでいる。ただ潜んでいるそれではないと云う問題にはならぬのでありますから、そうすると私共は、

観無量寿経を頂くと云うのはどう云う事であるかと云うと、それはただ韋提希夫人の問題で無くて、それが私共の問題となるのであります。私共は自分で自覚しておりますけれども、そう云う恐ろしい心持を持っておる。韋提希夫人がその生れた子供を高殿から下へおとした、そんな事はあるべからざる事であると考えますけれども、私は若い時にスイスの大教育者のベスタロッツと云う人の事を大分研究致しました。そのベスタロッツが一ツ大論文を書いて

おりますが、それは、この世の中には若い娘なんかで自分の妊娠した子供をそのまま闇に流したり、生れて来てすぐ締め殺したりするものが沢山ある。實際その当時のスイスにそう云う事が沢山行われていたと云う事をベスタロッツが知って、これは大変なことだ、こういう悪い事をすつかりやめさせなくちゃいかぬ。併しこれをやめさせるには法律でいくら定めても駄目である、法律でこういう悪い事をやめさせる力はない。どうしても教育によらねばならぬ。教育によって人間というものの尊さを知らせ、そう云う子供を闇に流すという事が如何に罪悪であるかという事を自覚させねばならぬ、と云う心持で大論文を書いた。それを私読んでみましたのでありますが、實際その当時のスイスの国にそう云う事が大分行われていたと云う事になりますけれども、それはスイスの国での事ばかりでは無い。他の

この観無量寿経でない、アジャセ王の事をもうちよつとあっさり書いてありますのが、阿舎経の中の沙門果経と云うお経であります。それを読んでみますとやっぱり阿闍世王に色んな大臣やら色んな人達が出て来て色々な教を聞きなさいと、十人近くのようにありますがお勧めするけれども、結局は阿闍世は耆婆の云う事を聞いて釈尊の所へ行つて教を聞くという事になっております。そして沙門果経を読みましても阿闍世はやっぱりビンバシヤラ王を殺したと云う事になっております。そうすると阿舎経と云うのは一番古い事実に近い事を伝えられたものとなっておりますから、どうも阿闍世がビンバシヤラ王を殺したと云う事は本当らしい、こう思うのであります。そしてビンバシヤラ王の悪い事はこの沙門果経には書いてありませんけれども、ビンバシヤラ王が殺されたと云うことは、一方では提婆達多が阿闍世をそそのかして、どうです、何時迄たってもお父さんは亡くならんんじゃないか、この分では何時迄たってもあなたは王様にはなられませんか、と云うような事を云ってそそのかして、結局殺せたと、それが多分本当でありましょう。そしてこの事実をもとにして我々人間の心の奥の根本の非常に恐ろしい問題をここに話されたものが観無量寿経の序分ではないか、と云う風に考えられますのであります。

国々でも日本でもそういう問題があるという事になりますのであります。そう致しますと韋提希夫人が生れて直ぐの阿闍世を突き落としたと云う話は、そのままの話では無いかも知れませんが、併しながらそう云う話によってどう云う深い罪が自分の心の中にあるか、それが何時外にあらわれて来るかも知れない、そう云う恐ろしい事を私共に知らせて下さる、それが観無量寿経の序分である。

王にも罪あり

ビンバシヤラ王も罪があるわけでありました。韋提希夫人にそう云う事をさせたのであります。二人共罪がある、その二人の罪というものは遠い昔の阿闍世王の物語という事で無くて、私共がまかりまちがえばそう云う事になりはしませんでしようか。そう云う事になるんだと云う事を観無量寿経の序分に於いて私共に告げ知らされるのはありませんでしようか。そう云う事を思いますのであります。ビンバシヤラ王は御承知の通りに非常に徳の高い王様で、釈尊が今から修行に行かれると云う時に、もしあなたが悟りをお開きになりましたならば、先ず第一に私を済度して頂きたい、と云う事を云った王様で、そして實際釈尊が悟りをお開きになったあと殆んど一番に釈尊に帰依したと云うような人でありました。そのビンバシヤラ王がそう云う事をしたのだらうかと先ず一通りは疑って見ます。けれども、

私としての告白

つまり私共の心の奥には非常に恐ろしいものがある。前に申し上げた観無量寿経のさつとしたお話を申しました時に、こう云う事を申しました。私が西洋に向つて旅立とうとした頃、父親は非常に病気が重くなつてもうどうだろうかと思う状態になっておりました。その時私が本当に親孝行の子供であつたならば、しんからそれを悲しまなければなりませんのに、どうも西洋の方へ行く事はかり考えて、そうするとそれが父親にひびきまして、「政雄は自分の病気の事をちつとも心配してくれない」と父が申しました。その時に私がああそうでございまして云うたならばまだしもでありますけれども、そうでなくて、いやお父さんのことと心配していますよと云ったのであります。そうして心の中でどう云う事を考えていたかと申しますと、どうせ死ぬものなら自分が西洋に向つて旅立たない前に死んでもらいたい、こう云う事を考えた。子としてあるまじき事でありました。けれどもその時の私は西洋に行くと言ふ事に心が迷つてこんな事を考えた。これは實際父親を殺しているようなものであります。だから阿闍世の問題はよそごとでなくて私の問題である、こう云う事を考えますのであります。そう云う事からだん／＼今のうちに私共の心の中には非常に恐ろしいものがあります。あるいは自分には自覚しな

仏世界の鏡

いでも、今のオイディプスの場合にひどい悪い事をやるかも知れない。そう云う風に私共は自分自身と云うものをこうだと保証する事が出来ない。そういうものである。人間はそういうものである。男も女もそうであると云う事をこの観無量寿経の序分は私共に教えて下さるのではない。か。そしてそういう私共が韋提希夫人のおかげで心の光の道に導かれて行く。仏のお教にあずかると云う所まで行く、そう云う所でこのお経の序分というものが本当に私共に非常に痛切にあたるものなのであります。それを私共はつい昔物語のように読んでおりますのでありますから、一向自分の問題と気がつかないでいる。こう云う事を私今日汽車でこちらへまいります途中、思いつきましたのであります。そうでありますからこれは韋提希夫人の昔物語のようになつておりますけれども、本当は私共の心の底までいたく沁み入るところの問題である。それを存外自覚しないで私共お経を読んでおります。こう云う事に思いつきましたのであります。どうでありましょうか。お経の御講者方はそんな事は仰言らんのでありますけれども、この序分の問題をつきつめて見ますとどうしてもそう云う事になる。自分と云うものが非常な実は恐ろしいものである。こういう事になるかと思つてあります。

ついで来られると云う事がありますが、その次の釈尊のあの有名な御言葉

「世尊は韋提希に仰せられた。『御身は知っているかどうか、阿弥陀仏はこの娑婆世界からほど遠くない所においでになる』」

この「阿弥陀仏是処を去ること遠からず」と云うあの御言葉であります。それがただ極楽世界というものを鏡のように見ているそれだけの問題じゃない。その極楽世界と云うものは、韋提希夫人よ、あなたの直接の問題である。向うに極楽世界があつてあなたの姿をうつして見せると云うのじゃない。この極楽世界はこの娑婆を去ること遠くないと云うのは、あなたのもうすぐ近く、或いはあなたを極楽世界の中に取り入れてあるのでありますよ、と云う事を仰言る。そのところが、自分の姿をただ見ていると云うのじゃない、この何とも云えないおそろしい自分と云うものがすっかりこの世界に取り入れられる。その所を釈尊は韋提希夫人に対しておっしゃったのではないかと思つてあります。

そうでありますから、ずっとあとを読みますうちに、韋提希夫人の前に阿弥陀仏があらはれておいでになつたと云

そうすると釈尊が眉間の白毫の光を放たれて無数の世界を照らして下さつて、そこに色んな清らかな国土があらわれて来る。七宝が寄り集つて出来た国、又もっぱら蓮華でうずまつた土、又他化自在天の宮殿のような国、又玻璃の鏡のような国などがあらわれてくる。それはつまり私なら私のそう云うおそろしい姿というものを照らし出すところの鏡のようなものである。その鏡の中で、韋提希夫人は「この沢山のお国はいずれも清らかで尊い光に耀いておりますが、私は今これらの中で特に極楽世界の阿弥陀仏のみ許に生れたいと思ひます。どうか世尊、私にこの極楽の世界の有様を観ずる方法を教えて下さいませ。そしてその観の出来上つた様をお教え下さいませ。」と云われる。それは自分の姿というものを、自分の何とも云えない恐ろしい姿と云うものを本当に鏡で見せて頂き、色々の美しい世界があらわれたと云うのは、韋提希夫人の姿をうつすところの鏡でありますと同時に、それは私共の姿をうつす鏡である。その鏡の中で最も明らかに深く私共の姿をあらわして見せられるのが阿弥陀仏の極楽世界という鏡である、そこまでは韋提希夫人が鏡を見て鏡の中に自分を見ていると云う事でありますが、そうすると一方ではピンバシヤラ王は、釈尊のお口から出た五色の光に照らされて非常に落ち

御紹介

うような所があり、そして阿弥陀仏は一切衆生の中にいらつしやるのであると云うあの有名なところがありますが、そこで韋提希夫人に、「阿弥陀仏の浄土、阿弥陀仏の御慈悲の光というものが韋提希夫人と一つになる、離れた世界では無い、向うに眺める世界じゃない、韋提希夫人の胸の中に一つになつてゐるのである」と云う事をおっしゃる。その所が大事な所じゃないかと、私は感じますのであります。そこから韋提希夫人の心特がサツと變つて来るのであります。ここまですべてお願いいたします。昭和四一・六・三

信仰余瀝 近角常観著、予約価、三五〇、**〒五〇**。

懺悔錄 近角常観著、予約価、三〇〇、**〒五〇**。

京都市左京区高野泉町四〇、文明堂。

振替、京都七七三四番。

待ちに待ちました近角先生の御著書の再版が十一月に出來あがりました。予約価で十一月一杯文明堂で受付けるところになりました、それも出版部数の関係上の由であります。配本は十一月末日になりますがお早く文明堂の方へ御申込み下さい。

あ
と

が

き



随喜讃仰していられます。これあつてか、過去久遠の罪業の身も、仏の大悲に浴して、更生の曙光を仰がせていただけるのであります。

○

白井先生の近角先生にお別れしての御原稿はこれで終らせて頂きました。先月末に、名古屋の池田和市さんが、「私は島地先生や前田先生にも教をうけましたので、近角先生と共によく存じて居りますが。白井先生が、夫々の先生から素直に教をおうけになっているのには驚きました。ありがたいことですなあ……」と述懐していられました。先生はこの夏頃からすっかり体力も御恢復され、各地の法縁に出席していられますことはまことにおよびたえません。

○

来春、成人の人達に、西本願寺から歎異抄をおくられる由、そこで「歎異抄と私」という題で数人の所感が記載されますについて、私も短文を求められて、心からのよこごびを以て切に歎異抄を御推薦申しました。この方々の灯炬となって、この書が行く手を照らしますようにと祈念しております。

○

福島先生の親経の御講話は、私共の心底を衝いて教えられますことであります。親鸞聖人が「淨邦縁熟して調達闍世をして逆害を興ぜしめ、浄土の機あらはれて釈迦韋提をして安養をえらばしめたまへり。これすなはち権化の仁、ひとしく苦惱の群萌を救済し、世雄の悲、まさしく逆誘闍提を恵まんとおぼしてなり」と、その御導きを

覚えます。ことに大国の間にある日本には、思想的にも経済的にも、難題が山積して居ります。若き人々の双肩には重大な責任がかけております秋、まことによき贈物をうけられますことでもあります。

御 案 内

※ 毎月第一、二、三日曜、午後一時半、

一道会例会、

市電、新郊通り一丁目下車、東入ル、

三筋目左入ル。

電話、名古屋、八二一局七〇三七番。

※ 毎月二十四日、午前午後。

昭和区小桜町、教西寺法話会

市電、御器所通り下車、

桜花学園東側。

定価 半年 二百円(送共)

一年 四百円(送共)

名古屋市南区駈上町二ノ八八

編集・発行人 花田 正夫

電話 八二二局七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷

印刷 刷入 本田 政雄

名古屋市南区駈上町二ノ八八

発行所 慈光社

振替口座名古屋一〇四七〇番